特集 2

白熱する携帯電話MNP auの高速データ差別化戦略

NTTドコモとKDDI／auは、それぞれ現行規格の機能を拡張した端末を今年後半に発売する。携帯電話の高速化・ワイヤレスブロードバンド化は新サービスの開発、サービスメニューの充実と差別化には、絶対的な前提条件となっている。

MNPは「攻めのau、守りのドコモ」

8月9日、導入日が「10月24日」に決まった瞬間に、番号ポータビリティ（MNP）の火蓋が切って落とされた。とりわけ動きが早かったのは、シェアの大幅増を狙うKDDI／auで、その日のうちに「転入時の手数料の無料化」を発表。8月28日には、一挙に12機種の新製品を発表して業界を驚かせるなど、その「攻め」の姿勢は際立っている。悲願の「シェア30%加入者3000万」に向けてMNPはまさに千載一遇のチャンスと位置づけている。

KDDIと同じくソフトバンクも9月1日、「転入予約受付」を開始した。MNPに向けてのトータル施策は一切発表していないが、ボーダフォンから「ソフトバンクモバイル」への移行の全プロセスがMNP対策ともいえる。8月26日、全国1800店舗の改装に向けてセレモニーが行われ、以降、各地で衣替えが進んでいる。

販売面では、NECからスカウトしたPC販売の実力者・富田克一副社長、ソフト流通でパイプの太い宮内謙副社長の力をフルに発揮して量販ルートを重視する戦略を取っている。

最大のネックであった3G基地局建設は、来春3月末までに4万6000局という過大とも思える目標に向けて準備を進めている。ただ、業者選定に波乱があったこともあり、現状では計画どおりには進んでいないというのが通建業界の共通認識だ。

他方、最も注目される端末は孫社長自らが陣頭指揮をとり、「世界最薄端末」「W-ZERO3を越えるスマートホン端末」「ヤフーをPCライクに使えるソフトバンクケータイ」などの準備を進めていると伝えられる。

料金・サービス面では、4000万超のヤフーユーザー、500万を数えるADSLユーザーを対象に、単なる値引き競争ではない、ユニークな組み合わせサービスを準備しており、10月1日の社名変更を前に「衝撃の発表」があると言われている。

ドコモは、かねてより「MNPは総合力の争い」「出るのも容易だが、戻るのも容易」というスタンスで、「端末、サービス、ネットワーク」をバランスよく整えることに腐心してきた。MNPは自ら言い出さない方が得策であることから、とかく「受身」「守り」の姿勢と見られている。MNPの受付も、一番遅い9月10日からだった。

しかしこの間、auのサービスで負けているところは着実に潰してきた。クレジットサービス「DCMX」に代表される新規分野もリードしてきた。「慌てずにやることをやる。ドコモの良さは必ずユーザーに理解される」という横綱相撲の姿勢を崩していない。

ワイヤレスBB時代に突入

そのドコモにとって、「攻めの武器」となるのが、8月31日からスタートしたHSDPA（High Speed Downlink Packet Access）だ。

端末は今のところ「N902iX HIGH-SPEED」とPCカード「FOMA M2501 HIGH-SPEED」の2つしかないが、ピーク時の伝送速度は下り3.6Mbps、上り384kbpsと、かつてのADSLを優に越えるハイスピードを実現する。

端末に実装する場合、消費電力などの制約があるが、規格上のピーク伝送速度は14.4Mbpsまで可能とされる。まさに「ワイヤレスブロードバンド」時代を招き寄せるものといえるだろう。

下りは現行の「FOMA」より約10倍のスピードアップとなる。これにより「着うたフル」を始めるなど、これまでauに先行されていた音楽系サービスの充実を図ろうとしている。

ソフトバンクもHSDPAの重要性を認識し、都市部の基地局はこれを厚くすると表明している。ヤフーコンテンツを自在に見られるという最大の特徴を強みとして生かすには、ネットワークの高速化は必要不可欠であるからだ。

「モバイルブロードバンド」を掲げ、来年4月に新規参入するイー・モバイルも、当初からHSDPA方式を導入する方針を表明している。

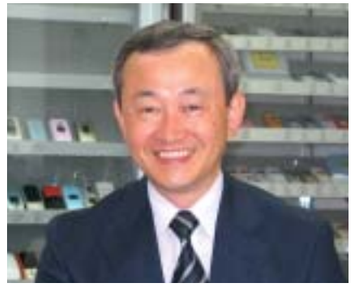
ドコモ、ソフトバンク、イー・モバイルともW-CDMA方式を採用しており、高速化のステップを踏んでいこうとしているわけだ。

MNPの波浪のなかで、高速化・ブロードバンド化は、携帯電話事業者にとってかつてない重みを持ち始めている。新サービスの開発、サービスメニューの充実と差別化には、絶対的な前提条件だからだ。

こうしたなかで、注目されているのが、KDDIの高速化への戦略だ。

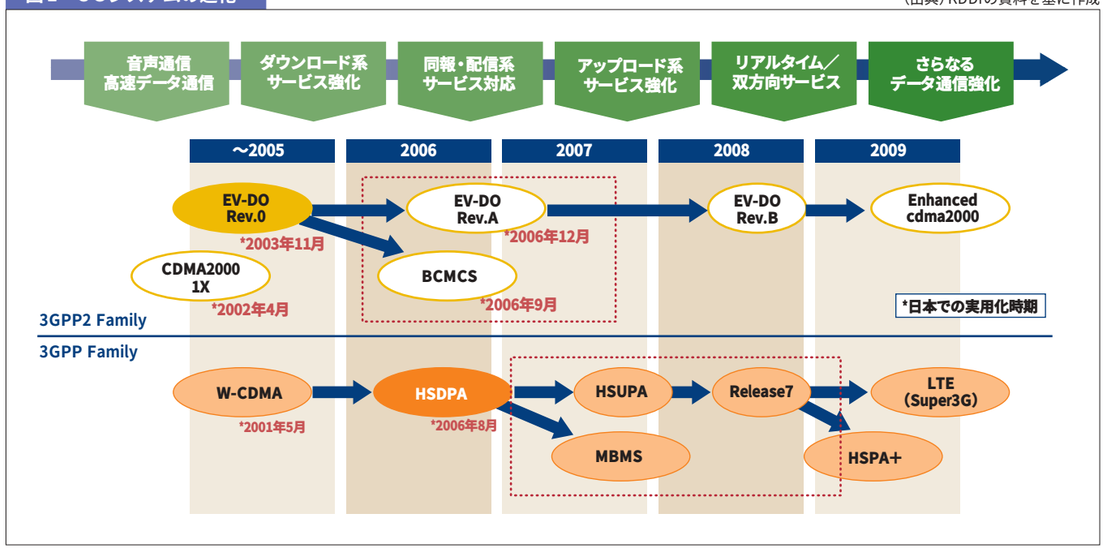
8月22日、CDMA2000方式のKDDIも、現行のCDMA2000 1X WIN（EV-DO Rev.0）の機能を拡張した「EV-DO Rev.A」のサービスを今年12月に開始すると発表した。

ドコモのHSDPAサービスの開始により、高速化ではいったんドコモに先行された感もあるKDDIだが、Rev.Aの特徴は「アップロード系の強化」と「リアルタイム双方向通信の強化」の2点。下りを高速化したHSDPAと比較すると、技術的にむしろ先行することになる。


KDDI技術統轄本部技術開発本部長の渡辺文夫氏

KDDI技術統轄本部技術開発本部長の渡辺文夫氏は「Rev.AとHSDPAは、下りの体感速度はほぼ同じだが、上りの性能が大きく異なる。リアルタイム双方向のサービスが提供できるので、実際の使用感はRev.Aの方が優れている。HSPDPAはむしろRev.0と比べてほしい」と語る。

これから、一気に高速化とワイヤレスブロードバンド化が進み、そこでのサービス競争が激しくなるなかで、注目されるKDDIの高速化への取り組みを探った。

図1　3Gシステムの進化

（出典）KDDIの資料を基に作成